

前号を読んで

勿体無いこと

津城寛文

人文社会科学研究科教授

原稿執筆のために、前号を含む数号を読んで感じたのは、つねづね思っていること、つまり「勿体無い」ということであった。

まず印象に残ったのは、ある号の「本特集のテーマを見てガックリする」という見識あるご意見であり、かつそのような批判をしっかりと載せる見識ある編集者の存在である。それぞれの大学の事情によっては、手取り足取りの取り組みが必要であろう。しかし、本学のような機関に求められるのは、先端領域の研究教育である。そのための能力を高度に備えた人材を擁する大学が、必要のない取り組みに優れた資源を浪費するのは、「勿体無いこと」である。

つぎに同感したのは、前号の人文社会学科のお二人の先生の、古典的な見識あるご意見である。文系の教員は社会に貢献していないといった批判を、本学でも時々耳にするのが気にかかる。もちろん軽口であろうが、これは自らの尊嚴を引き下げる悪い

冗談であり、しかも冗談の通じない人に乘じられる、危険な発言である。ためしに、文系教員のいなくなった筑波大学を想像してみれば、大学の格式がどこまで下がるか、歴然である。理科系の実験室に相当するのは、文系では研究者の無形の精神界であり、そこも有形の実験室と同様、良質の環境が保たれねばならない。知的共同体の価値を別方向から支えている基盤を、心無い軽口で掘り崩し、自らの地盤沈下をも招くのは、「勿体無いこと」であろう。

世間では競争的資金が導入されつつあるようだが、社会に貢献するか否かという基準で、研究費の配分が進められること自体は、実は致命的なことではない。人類の貴重な精神的遺産の多くは、逆境と極貧のなかで産み出されたものだからである。致命的なのは、価値を産み出す研究者の無形の精神界にとって、高度の知的緊張を維持する良質な条件が保たれないということ、具体的には、あまり知的能力を必要としない雑用の増加で、教員や学生の精神能力と貴重な時間が、果てしなく浪費されていくということである。本学のような機関にとつて、これが最も「勿体無いこと」ではなかろうか。

(つしろ ひろふみ／比較宗教学・哲学・思想)